

Case Study



社名: デジタル・アドバイジング・
コンソーシアム株式会社
住所: 東京都渋谷区恵比寿4丁目20番3号
恵比寿ガーデンプレイスタワー
URL: <https://www.dac.co.jp/>

デジタルを軸とした広告・マーケティングビジネスを国内外で展開、コンサルティングやプランニング、広告枠の仕入れ・販売、運用、結果解析までのトータル支援、クリエイティブ制作などグローバルなプロモーション支援を推進。

プロダクト開発本部
ディレクター
春名 光一氏

複数の CDN 運用におけるデメリット解消に貢献 ページ処理やログ収集などの迅速化を可能にする Fastly

広告・マーケティングビジネスを展開するデジタル・アドバイジング・コンソーシアム株式会社では、同社が提供する DMP をはじめとした各種サービスにおいて、JavaScript で作られた静的な設定ファイルやクリエイティブなどの配信に Fastly の CDN を活用。

プロジェクトごとに乱立する CDN、ガバナンスが不十分

1996年にメディアレップとして設立され、現在はデジタルを軸とした広告・マーケティングビジネスを国内外で展開しているデジタル・アドバイジング・コンソーシアム株式会社。コンサルティングからプランニング、マーケティング活動のトータル支援をはじめ、クリエイティブ制作や豊富なデータと高度なテクノロジーを掛け合わせたソリューション提供、グローバルなプロモーション支援などを行っている。

同社では、国内最大級の DMP 「AudienceOne®」や、LINE の Messaging API に連携したメッセージング管理ソリューション 「DialogOne®」など、マーケティング活動に役立つさまざまなサービスを提供しており、10を超えるサービス全体で月間100億を超えるリクエストが発生していた。そこで、JavaScript などで作られた静的な設定ファイルを効率的に配信すべく、以前から CDN を積極

的に活用してきた経緯がある。

しかし、限られたメンバーしか設定変更できず、複数の CDN が乱立するなどガバナンス不十分の状態が続いていたと当時を振り返る。「配信ドメイン名の設定がばらばらで、変更のたびにタグの張り替えをお客様にお願いせざるを得ない場面もあり、すべて自社の管理ドメイン名で配信したいという思いがありました。キャッシュコントロールについてもオリジン側で CDN やクライアントがキャッシュを行わないようにするヘッダーを一部で付与してしまっているなど、部分最適化されてはいたものの、統合された環境ではありませんでした」と春名氏は説明する。ログも十分に活用できておらず、複数の CDN 利用によって無駄な費用が発生するなど、改善すべき課題が顕在化していた。

設定のコード化による管理強化、ログ収集もリアルタイムに実施できる Fastly を評価

そんな折、CDN の契約更新のタイミングを迎えることになり、新たな環境にリセットすることを検討し、「CDN の設定やオリジンの設定をコード化することで、しっかりと管理できる環境にしていく

ことを考えました。また配信費用をプロダクトごとに費用按分できるように、ログをクラウド上のデータ解析基盤に流し込み、うまく情報活用できる仕組みを目指しました」と春名氏は語る。また、統制の

取れた環境を維持したうえで、担当者自身で設定変更が可能なセルフサービス化とともに、リクエストのタイミングで迅速に反映できるようなページ処理が可能な仕組みを検討したという。

そこで同社の目に留まったのが、Fastly が提供する CDN だった。「以前からページが早い CDN という印象を持っていました。分かりやすい設定言語である VCL が備わった Fastly であれば、管理のためのコード化など我々の考えている環境が整備でき

ると思えました」と春名氏。また、以前はログ取得に数日を要していたが、Fastly であれば管理画面で状況把握が迅速になる点も魅力的だと考えたのですと春名氏は評価する。

VCL については、手続き型の処理に慣れていればさほど難しくない印象で、事前に検証を行った結果、実際の運用でも活用できると判断。コスト面でも期待した削減効果が見込めることから、統合的な CDN 基盤として Fastly が選択されることになった。

月間230億リクエストの処理を Fastly に集約、コスト削減やページ処理の迅速化を実現



移行に関しては、キャッシュのTTLはオリジン側で付与する cache-control: s-maxage で制御することにし、ページ処理なども含めて既存環境と Fastly 向け双方に対応できるようオリジン側の設定変更したうえで、DNS の重み付けの振り分けで段階的に Fastly への移行を実施。現在は、同社が提供する10を超えるサービスの CDN 基盤として Fastly が運用されており、キャッシュヒット率も99.5%を超える状況になっている。2020年中には全て Fastly へ切り替わる計画となっており、設定情報に関しては Git 上でのコード化も実現している。

現在では、月間230億リクエストほど、配信ボリュームは300TB に達しており、顧客に配信される JavaScript などの静

的な設定ファイルは全て Fastly を経由している。ログについては、1時間ごとにクラウドストレージ上に蓄積したうえで Google BigQuery に流し込み、配信量の確認は Google データポータルにて可視化。リアルタイムな状況把握については、Fastly の管理画面やダッシュボード化を進めていた Datadog から適宜確認している。

今回 Fastly に CDN 環境を集約したことで、配信量を含めたログの迅速な可視化を実現し、CDN による配信費用も全体で3割ほど削減することに成功している。「以前は機能制約からページするまでに半日程度必要でしたが、今は30秒以内にはページ処理が可能となっています」と春名氏。また、ログがリアルタイムに把握できるようになったことで、改善も迅速に実施できるようになったことも効果の1つに挙げている。

Fastly については、何かあれば Slack 上のサポートチャネルから問い合わせでき、簡単なものではその場で、確認が必要なものでも翌日には回答が得られているという。「もともと Fastly では TLS 1.2 が通常でしたが、既存 CDN が TLS 1.0 や 1.1 だったこともあり、切り替え時に対応が必要でした。急遽お願いして迅速に対応いただくなど、柔軟な対応力も Fastly の大きな魅力の1つ」と春名氏。

セキュリティ機能や画像配信など Fastly のさらなる機能にも期待

今後については、当初目指していた配信管理のセルフサービス化や統制を図ったうえで Fastly を扱えるメンバーを増やすべく、社内での啓蒙活動を続けていきたいという。また、Fastly から得られた情報を有効活用し、チューニングも含めた改善活動につなげていきたいと語る。なお、現状は顧客向けのサービス基盤への適用だが、同社の Web サイトも含めた別の環境にも CDN が有効に機能する場面があると春名氏はさらなる展開の可能性について言及する。

コンテンツ配信に関連したところでは、社外・社内のセキュリティ監査で WAF 導入に関して指摘されることがあるため、Fastly WAF も有効な選択肢の1つとして検討できるという。さらに、画像の変換処理に関する要望が現場から寄せられていることが

ら、Fastly イメージオプティマイザーの検証を実施、すでに顧客への提案を進めている状況にある。画像の変換処理や配信がスムーズに実施できるだけでなく、動画の最適化も含めて実施できる Fastly イメージオプティマイザーに期待を寄せているという。

なお、アドテク分野ではインターネット広告分野で広く利用されているサードパーティ Cookie などが一部 Web ブラウザ側で段階的に廃止される動きが出ているが、その解決策の1つとして Fastly を活用することも可能だ。「いろいろな方法が検討できるため、社内にて対応方針を検討しながら議論を深めていきたい」と春名氏。最適な顧客体験を生み出す手法の1つとして、今後も Fastly 活用の幅を広げていきたいと最後に語った。

お問い合わせ

Fastlyに関するお問い合わせはこちら

japan@fastly.com

<https://www.fastly.jp>

@FastlyJapan

